
番外メモリアル・デー

ペロコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

番外メモリアル・デー

【Nコード】

N8545F

【作者名】

ペロコ

【あらすじ】

連載中の「メモリアルデー」の番外編の話です。思いつき次第更新なので不定期です。新蘭平和快青が主な登場人物となります。基本は、本編とリンクしています。そちらを先に読んだ方がいいと思われるかもしれませんが、こちらの話から本編に繋がることもあるかもしれません。では、楽しんでいただけたら嬉しいです（*^_^*） 最終更新は、邂逅記念話！1ヶ月遅れということでごちらに掲載させていただきますました。大変お待たせいたしました！！

サプライズ後

大騒ぎの後の静かな空間というものは、何だか寂しいような、でもどこか温かい雰囲気を残しているものである。

それがたとえ、つい30分ほど前までは大騒ぎどころか大乱闘のような時間を過ごしていた工藤邸であつたとしても、だ。

10分ほど前まで6人もの人間が集まっていた工藤邸に現在残っているのは、家主の新一ただ1人である。

今日が、新一の誕生日だからということで、サプライズパーティーを計画してくれたのはもちろん新一を喜ばせた。自分では忘れていたし、祝ってくれるということは嬉しいから、驚いたけど照れくさかった。19にもなつて、盛大に祝われるというのは気恥ずかしいものである。

でも、料理も申し分もなくおいしかったし、余興で見せてくれた快斗のマジックも十分に楽しめた。素晴らしく幸せだった誕生日パーティーを過ごせたと思う。

…………… たった1つのことを除けば、の話だが。

自他共に認めるプライドの高さを持つ新一にとって、おそらく人

生最大級の屈辱。

女装である。

「……ってオレはいつまでこんな格好してんだ!!」

自分に突っ込み、バサリをカツラを外す。

「くそつ、最悪だ」

ドスドスと音を立てて、恐ろしい形相で自室へと向かい、服を着替える。

「っていうか、この服はどうすればいいんだ……」

パーティーの時に快斗に着させられたブルーのワンピースを見つめて、途方に暮れる。

「憂鬱だ……」

優秀な頭がそのことを考えることを放棄し、ポツリと呟いて、リビングの片付けもそのままにベッドへ寝転がりそのまま寝てしまった。

翌日も祝日。子供の日である。

朝、いや、昼前に蘭がやって来て、ベルを鳴らすも家主の反応は無い。持っている合鍵を使って、勝手に上がらせてもらう。

「新一く？ まだ寝てるのー？ …… って片付け途中じゃない!!」

テキパキと昨日の片づけをこなしていく。

15分ほどで片付けた後、ようやく新一が起きだしてきた。きちんと眠れなかったのか、まだ目が半分寝ている。

「おはよう、新一。大丈夫？ 何か顔色悪いよ？」

「悪夢だった……」

「変な夢でも見たの？」

「ああ……。……や、いいわ。それよりサンキュ。片付けしてくれたんだな。まさか、片付けしに来たのか？」

悪夢から目覚めた新一が、ようやく目が覚めてきたようだ。

「違うわよ。今日はね、お届けものよ」

「届け物？」

心当たりは新一にはない。

「そうよ。——これこれ。はい、新一用に」

それは封筒だった。そう、ちょうど写真が入るような大きさの……。

嫌な予感が当たらないように願う新一は恐る恐る尋ねた。

「何だ、これ？」

「写真よ。ちゃんと飾ってね」

「ああ……」

曖昧に返事をしつつ、封筒を開け、次の瞬間新一は一気に目が覚めた。

「……快斗はどうしてもオレを怒らせたいようだな」

プチッと血管の切れるような音がした気がする。

その写真はもちろん、昨日のパーティーの時の記念写真だった。

平次・和葉・青子は、カメラに向かってピースして笑顔満開である。その横で、蘭は右を見ながら苦笑している。その蘭の視線の先、

写真の中央には、不機嫌丸出しの絶賛女装中の新一と、引っかき傷などが顔のところどころにある快斗が座っている。

このすぐ後シャッターが下りた直後に、

「怒った顔も綺麗だね、新一」

と凝りもせずに快斗が囁き、新一が顔を赤くして快斗に黄金の右足を当てようと思ったが、サラリと避けられて『鬼ごっこin工藤邸』が開催されたのだが、そんなことは今は問題ではない。

「何で蘭がこれを持って来るんだ？ カメラは快斗のだったろ？」

「黒羽くんがうちに来て、新一に持って行ってって言ったからよ」

蘭の答えに新一は脱力した。

「あ、ちゃんと飾ってよ？ 飾ってくれないと別れるからね？！」

「はあ！？」

「せつかくの思い出もん」

「いや、そうじゃねえだろ！？ 何で別れるなんて……」

意味が分からない。

「それぐらいの覚悟ってことよ。新一毎年誕生日忘れるんだもん。飾れば忘れないでしょ？」

「うっ……」

それは否定できない。

これはアレか。蘭に持って来させたのも、これが狙いか。いや、
こう言うように蘭に言ったのかもしれない。蘭に言われたら断れな
い自分を見抜かれていたのか。

新一が全てを悟り、半目になる。

「いい？」

「……わあっ たよ」

ただし。言われっぱなしの新一ではない。

「けど、オレが飾らなくても別れることはねーな」

「え、何で？」

快斗にこの作戦を聞いたときには、こんな反応が返ってくるなん
て想像していなかった蘭の顔に疑問が浮かぶ。

「だって……」

——蘭がオレと別れられるわけねえもんな？

次の瞬間、蘭の顔が赤く染まり、新一は大変満足そうに笑みを浮かべたそうだ。

サプライズ後（後書き）

【サプライズ後のサプライズ】

みなさま、こんにちは。ペロコです。2009年1発目の小説は、新たな連載でスタート！ということで、『番外メモリアルデー』です。タイトルの意味そのまんまで、この話で『メモリアルデー』に出てきたちよつとしたことを拾ってみたり、『メモリアルデー』の話のオマケみたいな感じのを書いていくつもりです。

さて、記念すべき1話は、本編でも1話を飾っていただいた新一バースデー話のその後を。写真を持ってくるエピソードを入れてみました。書きたかったんですよねー。本編では『迫られた』と書きましたが、実はこんな感じだった、みたいな（笑）

新一は快斗の企み（？）によって蘭が来ることになったのをもちろん見抜くわけで。もちろん「飾ってくれないと別れる」というのも快斗の案なわけで。でも、言われっぱなしの新一ではないわけで。あのセリフが浮かびました。甘いなー、新蘭。

この小説は、書きたいと思ったものがあれば書くので、必然的に不定期となります。

ではでは、感想お待ちしてます！

桜の下の再会

4月1日、桜の花びらが風に舞い、幻想的のようで実はかなり寒い春の日。東都大では、入学式が行われた。

今年の入学生は、今までの卒業生にどんな偉大な人物がしようと、敵わないに違いない。

「すっげー人。気分悪くなりそ」

「ちよつと快斗。今からそんなに大丈夫なの？——もう、快斗が新入生代表なんて信じらんない！」

「うっせーなー。オレ、トップで試験にパスしてんだぜ？ 当たり前だつての！」

まず1人が、この黒羽快斗。最難関と言われる試験をパーフェクトで答え、試験官がどこも間違っていないか必死に探したという噂だ。新入生代表として挨拶することになっている。

幼なじみで彼女の青子と一緒に、式が行われる体育館へと入って行った。

その後方50mの辺りを歩く大変賑やかな4人組がいる。

「何なんだ、この人ばかりは！」

「ちよつと新一。そんな怒るところじゃないでしょ？」

「せやせや。工藤はイライラしすぎやで」

「平次は調子乗りすぎや」

「やかましい！ 和葉こそ、毛利のねーちゃんとキヤーキヤー言うつつたがな！」

「服部くん、その『毛利のねーちゃん』っていうの、やめてくれな

い？」

「せやなあ……ほな『蘭』とかどや？」

「ぶっ飛ばすぞ服部」

「おー、怖。はいはい、『蘭ちゃん』にしといたるがな」

他人が口を挿む隙すら見当たらない。男2人が特に注目されている人である。

まず関西弁でテンポ良く軽快に喋る男が服部平次。関西から上京して来た探偵である。

そしてもう1人は、おそらく知らない人はいないであろう名探偵、工藤新一である。入学試験を1問ミスして、2番目の成績にて入学するエリート。ちなみに、その1問を落としたのは、ふと視界に入ってしまった蘭の横顔に気を取られ、考えることを頭が放棄したからというなんとバカバカしい話である。

それぞれ彼女となった蘭と和葉と一緒に体育館へと入った。

名簿順に従い、新一は皆と離れて並ぶ。

そして、ふと後ろの人物を見て心底驚いた。

年明け以来、姿を現さなくなって久しい月下の奇術師が素顔で普通に立っている。新一のことも気付いているはずだが、ポーカーフエイスで隠し通すつもりのような。何の反応も無い。

もう会えないと思っていた白き怪盗は、五体満足でそこにいた。元の姿に戻ってから必死に怪盗の正体を調べ、父親同士が知り合い

と知ったときは、本気で父親を恨みなくなつたが。

今はその名を捨てた奇術師、怪盗キッド。そして、……黒羽快斗。

まさか、ここにいるとは思わなかつた。知ってしまったら話しかけずにはいられない。振り返り、

「よお、コソ泥さん。元気そうだな」

と、口を開けば相手は目を丸く見開いている。けどすぐに、いつかの月夜で見た笑みを浮かべて、楽しそうに話してきた。

「名探偵こそ、お元気そうで何より。——ところで、新一って呼んでいい？」

無視するか誤魔化すかと思つていた新一は意外そうに目を開く。

「……隠さねえんだな。別にいいぜ？ 黒羽快斗さん？」

「新一に隠してもしょうがないでしょ？ 現に既にオレのこと知つてるみたいだし？ オレも快斗でいいよ」

これは認めてもらえていると思つてもいいのだろうか。嬉しさと照れのような恥ずかしさに、今更ながらに少し赤くなる。

月夜にしか現れず、誰一人傷つけることなく犯行を重ねた怪盗。

いつだってこつちが困つている時には現れて礼を言えないままに立ち去ってしまうヤツだったけど、本気でやる追いかっこはいつだってスリルに溢れていて楽しかつた。

元の姿に戻つて対決することをずっと楽しみにしていたのに、こつちが戻つてしまえば相手も現れなくなつてしまつて。必死に探して、見つけ出した1人の人物が自分と似ていると知ったときは驚き

を通り越して呆れてしまった。『新一』に化けた時は素顔だったに違いない。

いつか再会することが出来たら。そしたら、きっと誰よりも気楽な付き合いが出来る友達になれるだろうと夢を見てきた。

「じゃあ快斗、これからよろしくな」

新一がそう言ったとき、前方で快斗の呼ばれる声がした。

「はい！」

と元気に返事をして、キッド——もとい、快斗がステージへと歩いていく。

「何でアイツ呼ばれてんだ？」

全く話を聞いていなかった新一は意味が分からず呟く。そんな新一にはお構いなしに、快斗はステージに上がり、マイクに向かって口を開いた。

「えー、新入生代表の挨拶用に、挨拶文を今そこでもらったんですが、オレはオレなりの言葉で話さしてもらいます」

ざわざわする体育館内のおかげで、

「アイツ、新入生代表かよ……」

という今更ながらの新一の言葉はかき消された。

「今日という日、初めて会った人も再会した人もいるけど、目一杯楽しく大学生活を過ごしましょう！　以上です！」

そう宣言するや否や、POM　と煙に包まれた快斗は、煙幕が晴れるとステージ上にはおらず、元いた新一の後ろにいた。

一瞬の静寂の後、割れんばかりの拍手に体育館内は包まれた。

「……さすがだな」

「お褒めに預かり光栄です」

そんな会話は、当人たちにしか聞こえなかった。

式が終わり、お互いが一緒に来た人物を紹介して仲良くなり始めた頃。ふと新一と快斗は目を見合わせた。そして、同じことを思ったのか同時に吹き出し、笑い声が響いた。

先ほどの快斗による新入生代表の挨拶のこと。初めて会ったともいえるし、再会したともいえる自分たちの不思議な関係を考えて、思わず笑ってしまった。

初めて顔を見たのは、お互い偽りの姿をしていて。まさかその同じ日に、素顔で顔を合わせるなんて思いもしなかった。

シーズンにはまだ早い、夜空に咲いた一輪の『花』。

そして、風に舞う日本を代表する『花』。

今日という日に出会えたのは、きっと運命。嘘で塗り固められたような偽りの日々とは違う、本物のかけがえの無い1日1日を過ごしていける。

これから先、どんなことがあると笑って乗り越えられる予感に溢れた春の日、白い戦闘服を脱いだ元怪盗と偽りの姿から解放された名探偵は風に舞う桜の下で再会した。

桜の下の再会（後書き）

【入学式エピソード！】

みなさま、こんにちは。ペロコです。

ということで（？）、完成しました！ 入学式エピソード。『メモリアルデー』は、本来この話からスタートすべきでしたね。プロローグ的な感じで。かなり長いけど。

昨年大晦日に、入学式エピソードをちよつと入れたら、読みたいと仰ってくれた方がおられましたので、大体出来てたもの（本当に少しだけだったんですよ；）（それこそ大晦日での会話のシーンがもうちよつと長い程度）に肉付けをいたしまして、完成しました。

皆様、どの辺りが気になりますかね？ 色々突っ込みたいところもございましょうが！ ペロコからは1つだけ。

入学式の式自体は、新一さんが快斗に氣付いて回想等を始めた頃からスタートしております（笑）

他、氣になったところ等は、感想やメッセなどで呟いていただければ反応しますし、質問などあればいつでも承っております。結構無理矢理なところもあるだろうしね。

あ、本編でなく、番外としてアップしたのは、これもまた裏話的なものからです。かなり長いけど。（2回目）

……しょうがないでしょ！？ 書きたいこと詰め込んだら（特に怪盗さんの説明部分）、長くなりすぎちゃったんだから！（言い訳）お楽しみいただけてたらペロコは救われます。

番外の方は、気ままに書いていくのでサラッと読んでいただければと思います。

では、感想や突っ込み、その他『メモリアルデー』にて書いて欲しいものなどございましたら、出来るものは書かせていただきますのでぜひどうぞ！ とりあえず、当座は『キッドside』だな。完全に止まってるよ（汗）

これからよろしくお願いします！

ペロコからのお詫びとお知らせ

皆様、お久しぶりです。ペロコです。

この小説は不定期更新ということで、前回書いてからもう3ヶ月以上になりました。完全に放置のような形になってしまっているのですが。

「メモリアルデー」の番外編として書いてきましたが、今のペロコの状態からして不定期とはいえ本編すら更新できないのに番外編は更新できないだろうと判断いたしました。

なので、この場をお借りして「執筆停止」を宣言したいと思います。

「キッドside」も「メモリアルデー」本編も執筆を停止というにしているので、今ペロコが連載として書いているお話は全て停止という形になります。

ペロコには今現在全く余裕がありません。完全に自分の事情なだけなのですが。

「キッドside」や「メモリアルデー」で読まれた方はもう知っておられるでしょうけども、学校やバイトが忙しく、執筆時間が全く取れない状態が春休み頃から続いておりました。

不定期更新という形にはしていましたが、本編が更新されないのにこっちが書ける時間は作れるわけもなく、このような形になってしまいました。

このように小説の中にて説明するのは反則かと思うのですが、あ

らすじを一体どれぐらいの方が読んでくださるのか分からなかったし、詳しく説明しておきたいという思いから、反則技を使わせていただきました。申し訳ありません。

たった2回しか更新できていませんでしたが、シリーズの番外編というのも実は憧れの一種でして、ペロコは時間があれば書こう、書こうと常々思っていただけに、このような形になってしまっただけはペロコが1番残念です。

シリーズ本編の裏側だったり、ちょっとした続きだったり、……オマケとはまた違う魅力があると思うんです。お互いにリンクし合っていて、シリーズを1つの世界にしていくようなそんな感じ。言葉に上手く出来ないのですが。

また復活できた際には、このお話もやはり不定期更新という形ではあるかもしれませんが、書いていきたいと思っています。

復活の予定は夏です。……今のところ。そのぐらいには落ち着いていたらいいなという期待と願いも込めて。

長々とペロコの言い訳にお付き合いくださりありがとうございます。ごましました。

念願

「ついに来たで、オレの時代が!!」

こぶしを握り、立ち上がって宣言する彼の背後に波しぶきが見えていたならば、それは目の錯覚である。しかし、イメージは間違っていないので安心してほしい。

彼がこんな宣言をするに至った経緯の前に、まずは今の状況を説明しよう。

ここは、大学内にある食堂である。彼、平次の前には良く似た容姿の（だが、性格は全く違う）2人が座っている。現在の時刻はお昼を少し回った頃。つまり、食堂の中には大勢の人がいる。

情景は浮かんだだろうか。では次は、彼が叫んだ理由を説明しなければならぬ。

それは、ある1冊の小冊子が原因だった。

東都大学にある、1つのサークルが毎月発行している情報誌のよなものののだが、その中にある『。。。な人は誰?』というコーナーの学内アンケートが掲載されているのだ。学内に投票ボックスが数箇所設置しており、1ヶ月の集計が毎月こうして発表されている。今月のテーマは『夏が似合う人は?』というテーマだったのだが。

……さあ、お分かりいただけただろうか。東都大学に入って早く

も2年と3ヶ月。初めて平次が1位に選ばれたのだ。

「つーか服部。別にオメーの時代とかじゃねーから」

「そんなに大声で叫ぶようなものかなあ？」

「何言うてんねん！ 苦節2年と3ヶ月。今まで各企画で1位を搔つ攫っていったお前らに言われたないわ！」

目の前に座る2人に呆れたように突っ込まれ、座りなおした平次はギャンギャンと2人に噛み付いた。

「そんなこと言ったってなあ……？」

「別にオレ達が頼んだわけでもないしね」

「カーッ！！　そういうんはな、謙遜とちゃうで。嫌味って言うんや、い・や・み！」

「い、嫌味……」

「そんなつもりないんだけど」

「まあ今の服部に何言っても無駄だしな。ほっとこーぜ」

「そういうんは本人の目の前で言うもんとかやうんとちゃうか？」

思わず頭を抱えてしまった平次だが、その時に再び机の上に置いていた冊子が目に入り、顔がにやける。

「不気味だぞ、服部……」

『ほつとこー』と言ったものの、思わずといった形で突っ込んで

しまっているが、たとえ不気味といわれても平次の今の耳には入らない。

「もういいじゃん。そんなことよりさ、今日ってこの後予定ある？」

「この後ってーと……授業。刑法？と、経済学」

「いや、その予定じゃなくて、そもそも時間割ぐらい頭に入ってるし」

「は？ 何でオメーが知ってたんだよ」

「オレの情報網なめてもらっちゃ困るね」

「いや、知る意味ねーだろ」

「何言ってるの！ 警察に呼び出されちゃしょっちゅう授業抜けるくせに。誰のおかげでノート取れてると思ってるの？」

「……………」

にやけたまま、ついにはブツブツと呟き始めた不気味そのものの平次を横目に、2人の会話は続く。――それを聞く周りの大勢の学生がヒソヒソと話しているのには3人とも全く気付く気配がない。

ただでさえ、色んな意味で目立つ3人だ。それが人の集まる食堂でリラククスしているとなると、周囲の（主には彼らの隠れファンクラブの）ざわめきは、ただことではない。そもそも、彼らが話している内容など別に関係ないのだ。揃っているだけで満足できるファンクラブの方々は、ひたすら眺めることに集中するのみ。

「ま、そういうわけだから服部。オレら授業行ってくるわ」

「平次はどうすんの？ 授業あるんでしょ？」

「……、あ。せやっとな。行く行く」

ニヤニヤしていた表情を引っ込めて立ち上がった平次は、大事そうに冊子を胸に抱いて鞆を持った。2人とは違う授業だが、何となく一緒に移動しようと。

……が。

「あ、そういえば、平次って次は民法でしょ？」

「あ？ ああ……せやけど。ちよお待て。何でお前が知って……」

「その件はもういいよ。先生が風邪引いたとかで休講になったって聞いたよ」

「はあ！？ なんやねん、それ……」

せつかく行く気になったのに、とガツクリと肩を落とす。

「まあエエわ。もうその授業が無いんやったらこれで終わりやし、先帰ってるわ」

「あ、そう？ なんだ、授業終わったら久しぶりに一緒にボーリング行くつもりだったんだけど……平次は行かない？」

「は！？ いつそんな約束したんだよ！」

「あれ？ してなかった？ まあいいや、久しぶりにストレス発散しない？」

「……いいけど」

「それで平次は？ どうする？」

「せやなあ……久しぶりにやるかな。1位の實力見せたるで！」

「関係ねーし」

ボソツと呟くように右隣で突っ込んだ彼に、苦笑しながら続けた。

「ま、そういうわけだから、授業行ってくるし、終わったらまた連

絡するよ」

「待ってるわ」

ほなな、と手を軽く振る平次に、2人して片手を挙げてから食堂から去っていった。それを見送る平次は満面の笑みで、再びあの冊子を見ていた。

だから平次は知らない。去った2人が、

「なあ、服部って気づいてねーの？ 選ばれた理由」

「あの様子じゃ読んでないんだろうね」

「気づいた時、ぜってーうるせえぞアイツ」

「その時はその時だよ……」

そんな会話をしていたことに。

服部平次が初の1位を獲得したその理由の多くが『色が黒いとやっぱり夏が似合うよね』という半分バカにしたものだということに。

平次が気づくのはまだまだ先の話である。

念願（後書き）

お久しぶりでございます。

大変お待たせいたしました。以前からずっと言っていた「平次話」です。

えっと…、予想と違った方が多いかもしれないんですが、ペロコとしては最大限平次さんを立てたつもりです。（笑）

今この真冬に投稿するのもおかしな話なのですが、「番外編」ということでそこは何とか許していただくことにしまして。設定は昨年夏です。

今回は平次さんを立てるということだったので、色んなところがぶっ飛んでますが、それに突っ込む人はこの場にはいないということになっております。自分の中で突っ込んでおいてください。

ではでは、お楽しみいただけていれば幸いです。

まだまだマイペースな更新になると思われますが、今後もペロコにお付き合いくださると嬉しいです。

運命

「お願い新一！！　こんなこと頼めるの、新一しかいないんだ！」

「そりゃオレにしか出来ないかもしれないけど、無理だつて！」

「頼むよ、……もし断るならあのこと蘭ちゃんにバラしちゃうよ？」

「な、何だよあのこつて」

「えー？　新一がぁー、まだ小さかった時にいー、……んふふ」

「………オメー、それ脅しだろ」

「仕方ないんだよ、諦めな新一」

「………はあ、分あったよ。で？　具体的にはどうすりゃいいんだ？」

三月も終わりに近づいたのにまだ肌寒いこの季節、工藤邸で交わされた新一と快斗の会話。中には脅しのようなものも入っていた気がしたが、それほどまでに快斗は切羽詰っていた。

「うん、まあ新一なら大丈夫だと思うんだけどね。ちょっとは練習してもらわないといけないと思うけど」

「それよりオメー、いいのか？　だって……」

工藤邸で交わされた2人の会話から数日過ぎた、本日は4月1日。東都大学の入学式である。今年は寒さが長引いているせいかまだ桜はあまり咲いていないが、1ヶ月前まで高校の制服を着ていた初々しい新入生が続々と東都大学に集まってきていた。厳しい受験戦争を勝ち抜いて東都大学に入学する事が出来た新入生が1番最初に楽しみにしているのが、今日行われる入学式である。

かの有名な黒羽快斗の新入生歓迎マジックショーが開催されると

あつて、本来の入学式そのものよりもマジックショーのために胸を踊らせながら肌寒い中を大学まで来たと言っても過言ではないのかもしれない。それほどまでに、注目されていた。

そんな期待を一身に背負っている快斗は、衣装に着替えて準備の真つ最中だった。目の前にいる新一と手早く今日の打ち合わせを済ませていく。

「……これは最後の確認だが、本当にいいんだな快斗？」

「何回言わせるのさ。こんだけ気合い入ってるのに」

「分かった。もう言わねえ」

「それじゃ、新一。後は打ち合わせ通りによろしく」

「了解」

簡単に確認を済ませた後、2人は別れた。自分たちの役割を果たすために。

さて、新入生がひしめき合っている体育館では、いよいよマジックショーが始まるということもありざわざわと落ち着かない雰囲気漂っていた。

「では、本日のメインイベント、本校4回生、黒羽快斗のマジックショーです！ どうぞお楽しみ下さい！！」

司会者のその声にワァツと歓声上がり、ステージが暗くなる。スポットライトがステージに立つ黒いスーツと黒のシルクハットを纏った彼を照らし出した。

「ようこそ、皆様。本日はご入学おめでとうございます。少しの間ではございますが、夢のひと時をお過ごし下さい」

そう言つて一礼した後、シルクハットを外し胸に当て指を鳴らすと、シルクハットの中から1羽の白いハトが飛び出した。

鮮やかなマジックに、新入生からは拍手が起こる。

「この子は私のパートナー。名前はカールと申します。以後、お見知りおきを」

肩にカールを留めて、今度は何も無いところで手を翻しバラの花を出現させた。

「さて、このバラですがこの1輪、プレゼントしたいと思います。では、カール。よろしく」

そう言つと、カールにバラを咥えさせ新入生の方へと飛ばせた。口にバラの花を咥えてカールが新入生の方へと飛んで行く。そして、その途中でふわっとバラの花が嘴から落ちた時、そこでポンと煙が上がった。

「え？」

新入生に動揺が走るが、その真下にいた1人の学生から大きな声が上がった。

「か、怪盗キッドのカード!？」

「え?!」

「何で!？」

舞台上にいる彼にも動揺が走る。すると急に、体育館の電気が全て消えた。

「体育館にお集まりの皆様、お久しぶりでございます。この度はご入学おめでとございます」

妙に響くようなエコーのかかった声が体育館の中に響いた。そして次の瞬間、ステージ上にいた彼の目の前に真っ白の衣装を纏った怪盗キッドの姿があった。

途端に湧き上がる大きな歓声。そして驚きの声も聞こえる。

「何で!？ キッドはだってもう引退したんじゃない……っ!」

世間を賑わせていた怪盗が姿を消してから早数年。テレビの中継カメラも入った引退式は、馴染みの警部の怒号と、いやにあっさりした怪盗の挨拶が日本中に中継された。そして、本当にそれ以降彼が姿を現すことはなく、大勢のファンは楽しみをなくしたかのようにショックを受けていた。

その、怪盗が、なぜ、こんなところに。新入生の驚きは当然のものであった。

「本日限定で復活してみました。皆様の新しい門出を祝しまして、私からのささやかなお祝いを」

やけに軽いノリで告げた白い怪盗は、そう言うトンと軽快な音を立てて体育館上空から多くの紙ふぶきを降らせてみせた。途端に湧き上がる歓声。さっきまでの黒いスーツをまとった彼の独壇場だったのに、一瞬にして自分の舞台のようにしてみせるその手腕に、彼は改めて舌を巻いていた。

「では、ココで私の正体を特別にお教えいたします」

そして怪盗が告げたその一言に、シーンと体育館の中が静まり返る。さっきまでの歓喜の声が嘘のようだ。何せ、あの怪盗の正体といえば、トップシークレット。むしろ知らないからこそ夢を見れたのに。

「3、2、1！」

そんな新入生の雰囲気などお構いなしに、勝手にカウントダウンをスタートさせ、そして自分は煙幕に包まれた。

そして、その煙幕が晴れた時、そこに立っていたのは、黒いスーツを着た彼と全くの同一人物だった。

一瞬の沈黙。目の前の状況を脳が処理した時、再び体育館は大声に包まれた。

「何で――！！？」

同じ人間が2人いる。それは間違いない。え、怪盗キッドは黒羽快斗！？ いやいや、今日の前に彼はいるじゃないか。じゃあ、もう1人は？ 動揺が走る。

すると、それまで無口で佇んでいた本来の主演が、口を開いた。

「皆様、お忘れですか？ 本日は皆様の入学式であると同時に、ある日だということを」

ポカーンと口を開いたままの新生に向かつて彼が吐いたセリフは、ひどく簡潔なものだった。

「エイプリルフル、ですよ？」

そう言つて、ニヤリと笑つた黒いスーツの彼は、後ろを向いて髪の毛をぐしゃぐしゃとかき回した。そうして再び正面を向いたその顔は、やはりこれもまた有名な彼だった。

「く、工藤新一ー！？」

新生生の声が綺麗にハモつた。その声を聞いて、「おおっ」と本人は感心しきつた表情を浮かべた。

「エイプリルフルとはいえ、皆様を騙す形になったことはお詫び申し上げます。ですが、この横にいる黒羽快斗本人の意向だったので、オレは仕方なく……」

「ちよつと新一。最後は割りと乗り気だったじゃん」

「……とにかく、改めまして本日はご入学おめでとうございます！ たくさんの出会いがこれから待っているかと思ひます。楽しくて笑いある日々をここで過ごしてください」

「驚かせてごめんなさい。では、本日はおめでとうございました。そして、我々のイタズラにお付き合いくださりありがとうございます。それでは」

そう言つと、ステージの上は煙幕に包まれ、前方に座っていた新

入生たちが咳き込む。しかし、その煙幕が晴れた時にはステージ上にはもう誰もいなかった。

体育館の中がワアツと歓声と拍手に包まれる。驚きの連続だったが、マジックは大成功だった。

「ひどいよ新一。全部オレのせいにするような言い方!」

「言い出したのは快斗の方だろ。間違つてねえよ。むしろオレは最初は反対だったんだからな。冗談とはいえ、本人がキッドの恰好して登場してどうすんだよ」

「うーん、そこを言われるとどうしようもないんだけどねえ。この日ぐらいは『嘘』の恰好したくなるんだよね」

「なんたつて、俺達の強烈な邂逅の日だし？」

「……はあ。とりあえず、コレ、脱いでいいか?」

「きゃー、新一のエッチ! こんなところでダ・イ・タ・ン!」

「ふざけてんのかバ快斗!」

「あはははっ!」

先日工藤邸で交わされた会話には続きがあった。

「それよりオメー、いいのか？ だって……」

「いいんだ。それに、その日はオレにとって特別な日だからね。いいじゃん、その時ぐらい」

「オメーがそう言うなら、オレは構わねえけど。でも危険じゃねえのか？」

「そりゃ絶対大丈夫っていうことはないかもしれないけど、この日だけは袖を通したくなるんだよね毎年」

「ふーん」

「それだけ新一は強烈だったってことだよ とりあえず、新一。当日まで特訓開始ね」

あの日、あんな形で対面したからこそ、今の俺達がいると思わない？ きっと、運命だったんだよ俺達の出会いって。

運命（後書き）

大変遅くなって申し訳ありません…っ！（土下座）
あああああ…まさかの1ヶ月遅れ…ありえない。

しかも何か思ってたのと違う！

いや、簡単に言い訳させてもらうと、単純に書きたかったのは快斗と新一が入れ替わってマジックするっていうところだったんですが…。ムダに長い上に分かりにくいな文章だと。自分の文章力の無さに泣きたくなるよ。

お待たせした上に妙な話で期待されてた方を裏切ってしまったのではないかとビクビクです。

最後の快斗さんの心のセリフは、『銀翼』のポスター…っていうかキャッチコピー意識してます。

もっと長い言い訳と裏話はいつものように、後で『活動報告』に書きます。興味ある方はお時間ある時にどうぞ。
↑

お楽しみいただけていたら嬉しいです。

願い

——ねえ、快斗。私ね、多分どこかで分かってたんだよ？
ずっと前から……。

1年に1度、織姫と彦星が会える七夕。綺麗な星空の下で、笹に
願いを書いた短冊を吊るして、そして願う。誰よりも君に幸あれ、
と。

けど、毎年のことながら日本特有の季節である梅雨が原因で、星
なんて見えない真っ黒の雲に覆われた夜空を見上げて切なくなる。

星に願いたいのに、その姿を見せてもらえないということは、願
いも届かないのではと。

快斗がアメリカに行ってから、もう1週間とちよつとが経った。
聞かされた時はもちろん驚いた。当然でしょ。本当に突然だったん
だから。あまりにもアツサリと言うもんだから、冗談じゃないかと
思いたかった。

でも、口調は軽くても目が真剣だったから。

ああ、快斗はもう決めちゃったんだなと。だったら青子が何を言
ってもその決意は揺らぐはずもなく。

ただ『行つてらっしゃい』と見送るしかなかった。

蘭ちゃんも和葉ちゃんも、工藤くんもビックリした顔してた。快
斗に驚くんじゃなくて、青子に対して。どうして止めないの？　っ

て。離れ離れになっちゃうんだよって。

どれだけ時間がかかるのか分からない、快斗のマジック修行。もちろん、会いに行こうと思えば会えないわけではないから、何も心配してなかった。本当に真剣にマジックに対して向き合う快斗を誰よりも近くで見えてきたって自信持って言えるから。その快斗がもう決めた事に対して青子が何かを言う資格なんて無いんだよ。

その代わりと言ってはおかしいのかもしれないけど、蘭ちゃんが凄く怒ってた。多分、工藤くんがいなくなってた時の自分と青子が重なったんだと思う。青子を心配する一方で、快斗のことを凄く怒ってたから。

でも、青子だって、蘭ちゃんと同じぐらいの思いをしたことがあったから。だから、何も言わなかった。

快斗が、まだキッドだった時。青子にも何も言わずに姿を見せなくなったときがあった。時々、怪我をして帰ってくるがあったから、多分すごく危ないことしてるんだってのは分かってたし、だったら青子は何かを言ったところで邪魔にしかならないと思ったから、快斗を信じて待つしかなかった。

多分、蘭ちゃんもこれと同じ気持ちだったんだと思うんだけど。

帰ってくると信じてる。信じてるからこそ待つし、何も言わないで送り出した。でも、何も言ってくれないのは、やっぱり辛くて。自分の中の矛盾した気持ちの整理がなかなか着かなくなってきてた。

そんな時間を過ごしていると気づいたら今日は七夕だった。遠く離れたアメリカにいる快斗と、日本の真っ暗の夜空を眺めてる青子が、彦星と織姫に重なって何だかとても切ない気持ちになる。姿も見えない、声も聞けない、けれど、今日だけは会うことを許され

た天の上での逢瀬。日本の東京から見える夜空は曇り空で星も見えないけれど、その雲の上では2人はちゃんと会ってるんだろつか。青子は快斗に会えないから、せめて織姫さんはちゃんと彦星さんに出会えているといいなと、心から願ってる。青子の分まできちんと会って思いを確かめ合って欲しい。

そんなことを考えていると突然涙が溢れてきた。

「あれ……？ おかしいな」

頬を伝う雫がポタポタと膝に落ちる。部屋の窓から空を眺めて感傷的になりすぎたからかな。快斗を見送る時ですら泣かなかったのに。何で今頃泣けてくるんだろっ。

「会いたいな……」

鳴らない携帯を眺めて呟いてみても、その思いも声も快斗に届くことはなく。ただ、余計に切なくなるだけだった。

「快斗……、頑張つて。帰ってくるの、待つてるから」

青子が遠く離れた日本から出来ることなんて、ただ応援して待つことしか出来ないから。

さあ、涙を拭いて。きっと雲の上でちゃんと出会えたであろう彦星と織姫をお祝いして。そして青子の願いも叶えてもらおう。

快斗へ幸運を。願わくば、その声を聞かせてと。

机の上へと置いた携帯が鳴り響くのは、それから5分後――。

願い（後書き）

大変お久しぶりでございますペロコです。

そして大変お待たせいたしました七夕お話。青子ちゃん独白スタイル。

快斗さんはもうアメリカへと旅立った後。完璧に遠距離恋愛です。切ないっ！！

快斗さんの出番全くありませんけども、切ない快青イメージで。七夕って、どうしても切ないイメージがペロコの中から離れてくれなくて。だから青子ちゃんを泣かせてしまいました。

多分、お見送りの時はちゃんと笑顔を見せてると思うんです。マジック修行というのを誰よりも応援してると思うから。自分と離れ離れになるというのは、多分その時点ではそこまで実感してなかったんじゃないかなと。で、今回離れてしばらく経って、じわじわと実感してきたんじゃないかな。

最後に鳴った携帯の相手。

特に「誰」と決めたわけではないんですが、快斗さんを想像された方が多いかもしれません、まさかの大穴で新一さんだったらコレはこれで面白いかもしれないとか考えてスイマセン。（笑）

長々と失礼しました！最後までお読みくださりありがとうございます♡

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8545f/>

番外メモリアル・デー

2011年10月3日12時10分発行